

過去との対話が気づかせる、足元の文化や風土」

## 都市に「陰影の温もり」を取り戻すために

歴史ある都市からも失われつつある「陰影」や「曇り」――。

経済と効率優先の文明が奪ってしまった文化や風土の奥行きをその温かさとともに、暮らしの中に取り戻すには、どうすればいいのか。ヨーロッパの試みなどをヒントに、陣内さんが語る。

建築史家・法政大学教授

### 陣内秀信

●じんない・ひでのぶ 1947年福岡県生まれ。法政大学デザイン工学部建築学科教授。水の都市の比較研究などを研究テーマとする。『水の都市 江戸・東京』（講談社）、『イタリアの街角から スローシティを歩く』（弦書房）など著作多数。

### ベネツィアの光

「都市と陰影」という言葉を聞いて、私の脳裏にまず浮かぶのは、イタリア北東部の町、ベネツィアの夜景です。マルコポーロ空港を飛び立った飛行機から見渡した、町の明かりの対比が忘れられません。

ラグーナと呼ばれる浅い海に囲ま

れたベネツィア本島は、夜のとぼりが下りて照明が灯りはじめた時間でした。町はどこかホッとするような温かみを感じる明かりと薄暗さに包まれていました。

しかし本島の先に広がる本土側の町の明るさは異質でした。十九世紀から二十世紀前半に造られた住宅街と埋め立ての工業地帯は、水銀灯が町の隅々まで照らし、自動車がすこ

いスピードで走っています。東京や他の大都市と変わらない煌々とした人工的な光を放っていたのです。

上空から見た本島の薄暗さと、近代に発達した新しい町の明るさのギャップ。そこにライフスタイルや電力消費量の違いをあらためて突き付けられた気がして、私は愕然としました。中世から続くベネツィア本島も本土側の近代の市街地も、自治体

としては同じベネツィアなのに、これほどまでに違うのか、と。

私は学生時代の一九七三年から二年間、そして九一年から一年間、ベネツィアに留学し、本島で生活を送りました。いくつもの運河が流れる町の雰囲気がとてもよかったです。

夜が更けると町は静寂に包まれます。聞こえるのは、波の音、鳥の声、道ゆく人々の革靴の響き……。人間や自然が作る音がするくらいで、自動車のエンジン音をはじめとする機械音はほとんどしません。

何よりもいままで暮らしていた東京とベネツィア本島とは、光の演出がまるで違っていたのです。たとえば、屋外の照明は、ワンポイント。ベネツィアの運河に架かるのはすべて太鼓橋で下を船が通るのですが、太鼓橋をワンポイントの照明が照らし、カナル・グランデという大運河

を臨んで建ち並ぶパラッツォという邸宅では、日が暮れると室内にぶら下げられたシャンデリアが灯り、通りにまで明かりが漏れてくる。

よく足を運んだサンマルコ広場に建つマルチアーナ国立図書館では、全体的に薄暗い室内でみんな手元だけをスタンドライトで照らして本を読んだり、勉強したりしていました。日本人の感覚からすると暗く感じられるかもしれませんが、もしかしたら視力には悪いかもしれないけれど、精神的にはとてもよかったです。歴史ある建物で薄暗いな古い資料を読んでいると、とても哲学的な気分になってくるんです。いま、ぼくは勉強しているんだ、と（笑）。

### 都市とスローフード

ベネツィア留学時代、ひとりの日

本人画家と知り合いました。一九〇〇年生まれ、別府貴一郎画伯。作家の林美美子らと交流があり、日本美術会委員長などを務めた経歴もある洋画家です。

ベネツィアは季節や時間によって風景ががらりと変わります。夕暮れどきになると、別府さんは決まって外出していきました。陽が高い時間帯は、建物のフォルムがはっきりとしている。でも、西の海に太陽が沈みはじめると、町の風景が平面的になり、シルエツトが美しくなる。別府貴一郎が描いたのは、そんな遠近感を失った夕闇の風景でした。

私の目に焼き付いているのは、観光客が去ったあとの、霧が漂う冬のベネツィア。自分自身の手が見えなくなるほど濃い乳白色の霧のなかで、そそくさとカフェに入る人々、誰もいない広場に舞う落ち葉……。